# 山州名跡志

ル 4
1345
14

儿号4
1.345
14

# 山州名跡志卷之十四目錄

宇治郡

日岡峠　山科　御廟野
天智帝陵　明王寺　藪下
阿弥陀堂　鏡山　日向社
鎮守社　安祥寺堂　開山堂
地藏寺　業平山莊　竹鼻　護國寺
神比和哥　毗沙門堂　諸羽社　四宮河原
十禪寺堂　招月庵　山階宮　泉水石
追分　地藏堂　鶯丸塔　山科里
音羽河哥　神無森　牛尾山和哥　音羽山和哥
音羽瀧和哥　法嚴寺堂　鎮守社

天智帝宮　供宮　瀧　大門
音羽里和哥　若宮八幡　大宅村　岩屋神社
大宅寺　王上　唐門　泉殿
中御門　澤井　興福寺橋
佛足石　大圓寺　小野　同塔
化山和哥　阿弥陀堂　蓮華谷　蛇谷
櫃河　元慶寺　僧正遍昭墓　八幡田
栗栖野和哥　高背坂　田村丸塚　濘石越
蓮如塚　實如塚　空也寺　本願寺
同石碑　白河寺　後白河院塔　空也塚
同堂　氷室池　兩社　勸修寺
八幡宮



揖社　種子椙　神輿塚　小野
曼荼羅寺堂　鎮守　小町水　少將通路
櫻塚　計塚　野色山　後山科陵
小野陵　小野墓　後小野墓　醍醐
醍醐帝陵　竹谷　龍谷　陵町
朱雀院陵　赤間　醍醐寺堂　塔
清滝社　開祖堂　長尾　天神宮
三寶院　藤戸石　理性院　無量壽院
阿弥陀院　花見山　深沙王塔　上醍醐
清滝社　龍神石　閼伽井　觀音堂
五大堂　如意輪堂　祖師堂　白山社

藥師堂　經藏　延喜帝行宮　報恩院
無量光院　感琳院　惠心院　蓮藏院
適智院　雛坂　寂靜谷　延命院
白山社　直谷　南禪院　大路東同西
毘沙門堂　焰魔堂　南里　善願寺
庄口　一言寺堂　内侍影堂　笠取和哥
横尾　毘沙門堂　清滝社

山州名跡志卷之十四目錄畢



# 山州名跡志卷之十四

瑜伽林隱士　如是相　白慧撰

## ○宇治郡

○日岡峠　在粟田口東　有民家　名村

此所ヲ号日岡ハ。地勢南北西皆山ニシテ東面晴タリ。是故ニ日先ッ照スヲ以テ号之也　一書ニ作日向

●日向社　今亡其地在村北爲田。有滾井水無增減清潔是所在社地　件社或說曰所祭瓊ノ杵尊云云　案ズルニ此尊ヲ薩摩國日向可愛山陵然ルニ此地号日向說有故。又所祭有謂歟

○山科郷　或作山階　在日岡東　如今郷内有多村。

所謂日岡陵四宮安祥寺竹鼻音羽小山
大宅野村花山西山等ナリ

〇御廟野　在日岡東　号有天智天皇陵故也
凡ソ号山科此所ヨリ東ハ逢坂山ヲ限リ南ハ限大宅村
也是則今ノ定メ也蓋所載舊記ハ木幡及笠取等モ
尚山科郷也則詠古歌載次下

〇天智天皇陵　在同所東北平林中　鳥居南向石柱
額　天智天皇竪額筆者不考　小社南向在隔鳥
居二町許　〇御沓石　在陵南面　傳云天皇御沓
在此石上其形自然平直如工作東面七尺許南北
三尺許厚或八寸或七寸或五寸許

〇天智天皇諱天命開別又名葛城皇子舒明帝太
子也治天下十年天智十年冬十二月三日崩于近
江官藤山代山日本紀取要

〇延喜式曰近江大津宮御宇天智天皇陵在山城
國宇治郡兆域東西十四町南北十四町陵戸六烟
（巻二十一出四十二丁）

〇一説此帝ハ登天シ玉フト云云

〇水鏡云心神浸々天智天皇ものうさ和
なりうさ　或書云万葉第二ニハタノコハタノウヘヲ通フ
トハメニハミレドモタヾニアハヌカモ右ハ万葉第二云近江
天皇御製不豫御病悩之時后皇太后歌

然ども御門(ミカド)これに病まうけてハ崩(ウセ)給ひぬ。大津(オホツ)の宮(ミヤ)にて世をしろしめし
給ふ事十年(トセ)乃十二月なり。山城国山科にて御幸(ミユキ)ましまして
ある日わけいりて其ままに帰らせ給はずして御沓(クツ)のおち
たりける所を陵(ミササギ)となして後そこに所をかぎりて鏡山と名
付られしより后(キサキ)の御歌にも此陵(ミササギ)のうへを書とめ給ふは
みなこれをたゞふあはれなりともと後世(ノチノヨ)まで語りつたへざり
山科の木幡(コハタ)乃山をさして其おもかげを語りつたへて後(ノチ)の世まで
あふぐ世のためしとハなれども大津(オホツ)の宮にうつし崩御(ホウギヨ)のよしをのべた
まへるを是ハ史紀(キ)の心(コヽロ)をあらはしたるものとぞ思ひ侍る
さハ記せるになりて日本霊異記といふ書(フミ)に登仙(トウセン)の事ハ



載(ノセ)たり。さて后(タイコウ)の御歌にこそあはれもみえたれ。磨(?)
にも天智天皇(テンヂテイ)乃陵(リウ)よりつゞきてその国までの
御門のはかなきためしなりとぞ世にいひつたへて御(タメシ)にハ
なりとぞ

○鏡山　陵別名

萬葉集第二 従山科御陵退散之時。額田王作歌一首
八隅知之和期大王之恐也。御陵奉仕流山科
乃鏡山尓　下略

或曰。此陵東村雖号陵村。有陵邊。号御廟野。凡當國
中不号陵而号御廟。此所耳而餘皆云陵。可有義也
ト。予答曰。僕就考名跡。好士族無僧俗相逢アリ。然レ圧

於此無寄意子八有感情哉爲ニ可語此陵ニハ上ニ有
八角堂安　宸影故ニ有此号也應仁ノ兵乱ハ近隣岩
倉山兵士ノ屯ナルユヘニ雖兵火滅ス其柱礎八角ノ相今
猶在リ子獄悅ス翌日行向テ拜覧スト云フ

○明王寺　在陵東四町許ニ号奥堂　謂心ハ此ノ所民
居ヲ去テ隱幽ナル故ナリ　○寺東向　本尊十一面
觀音　立像四尺　作慈覺　開基不詳　又安閻浮檀
金觀世音　立像一寸八分　此像智證大師自唐土所
將來云云

藪下地名在鏡山東　此所ノ者多ク八刻莨菪爲業故ニ
于世云藪下刻

○阿弥陀堂　在同所北方南向　本尊　阿弥陀佛
坐像八尺　作　行基　開基　同僧　斯所北二町餘ニ
葬所三昧アリ是即行基ノ所開此堂葬所ノ本師堂也。

○安祥寺　在阿弥陀堂東一町許而入北五六町山
上　境地南面　宗旨　真言　堂南向　本尊　十一
面觀音　立像一尺餘　作不詳
五智如來　安同堂内　古當山伽藍本尊也　作不考
○地藏堂　在佛殿東南面　本尊　延命地藏　坐像六尺許
作不詳　右此尊ハ惠運僧都唐土ヨリ將來ノ像ナリ。
霊驗古今ニアリ

○開山堂　在地藏堂南東西面　安兩像

北恵運僧都　南宗意僧正　共當山爲中興有勲功傳載眞言血脉

○鎮守社　在佛殿西　鳥居南向木柱　社南向

所祭　青龍權現神傳載次下

當寺初ノ地ハ從此北ノ山上十餘町ニアリ。衰微ニ及ンデ。今ノ地ニ移ス。舊地ヲ呼テ云檀谷。又其傍ニ云御所谷アリ。右到舊地順路ハ。今ノ毘沙門堂ノ路ニテ其堂ノ坂口ヨリ當北至西谷是也。又安祥寺易地三度第二ノ度ハ今ノ所ヨリ二町許南西ノ方ナリ

○三代實錄白貞觀七年七月十九日戊戌緣太皇大后御願於安祥寺永代相承持念尊勝眞言轉讀孔雀王經及諸宗經論其願文曰深悲遠慮調御用心勝利常行薩埵攸急要從去貞觀元年志建立安祥寺奉爲田村　天皇每月一七日令一七口僧持念尊勝眞言至今七箇年已又令彼寺年分柄山僧等結番晝夜無間轉讀諸宗經論以奉翊　聖朝加護國家下略卷十出四十丁

私云太后染殿后明子。田村天皇ハ　文德天皇也

○又云元慶三年四月七日丙寅　粮田三町二段五十歩在山城國葛野郡上林郷永施入安祥寺。卷三十五出十六丁

○文德實錄曰齊衡三年十月已丑以山城國宇治郡粟田山施入安祥寺卷八出十四丁

○伊勢物語 七十七段 むかし男有けり 三河のくにあづまの方へいとしのびにていきけり 三河の国あづまの道にあるかきつばたといふ所にいたりぬ 其沢のほとりにかきつばたいとおもしろく咲たりけるを 木の陰におりゐて かきつばたといふ五つの字をかしらにおきて 旅をしぬべしとよめりけるを 人みな かれいひの上になみだをおとしてほとびにけり

右大臣良相女嘉祥三年女御天安二年十一月十四日卒 當寺最初地有別勘記巻末

●在原業平山莊 在同所 今毘沙門堂ノ坤ナリ

右古來ノ傳説ナリ

竹鼻所名 云安祥寺門前巽衛道南

○了光山護國寺 在同所大路南 宗旨 法華

屬京師妙傳寺 門北向 寺東向 開基 法性院

日勇 妙傳寺第十四世也以當寺爲一宗學室今尚連續

○地藏寺 在護國寺南 宗旨 禪 門北向 佛殿東向

本尊 地藏菩薩立像三尺許 作 弘法大師 同所

注曰定家卿歌物曰女御從四位下藤多賀幾子

南脇壇安尊氏公像 坐像二尺四五寸許。衣冠黑袍帶劔

開基 鍾山曉禪師 當寺如今播州綱于龍門寺ノ盤珪和尚ノ再興ナリ。其法德以世知之 門弟依上奏賜佛智禪師號 元祿年中寂

○毘沙門堂 在安祥寺東北 境地南面 宗旨天台寺勢 御門主 佛殿南向 本尊 毘沙門天 立像小像作未考 開基 傳教大師 舊地未考

傳云。此本尊初安南都。中比移平安城。今出川上。其所爲應仁兵火回祿。今云塔壇所。當寺ノ有塔所ト。回祿已後本尊所々ニ遷リ。敞山慈眼大師相傳セリ。近世此所ニ再興アッテ移サル

○諸羽明神社 在毘沙門堂東 鳥居南向石柱額 諸羽大明神 竪額 筆者不考 拜殿南向在鳥居內二町餘 社南向以丹青彩 所祭二坐 天兒屋根命 天太玉命 按二神以高皇產靈尊詔而爲天孫左右羽翼之臣也。故名兩羽耳。古作兩羽。今改爲諸羽 神社啓蒙

當社ノ号四宮。謂ハ山科郷內ニ一二三四宮アリ。當社其第四ナル故ニ号之云云

土人爲產沙神。 例祭 九月九日 凡ノ山科ノ郷內諸社ノ例祭同日ナリ

四宮河原 河原今無。件ノ社ノ邊古ハ河原ナリ。其故ハ自此所東今十禪寺ノ西ノ河直ニ此鳥居ノ邊ニ

流レテ南ニ至リシ也。今ハ十禪寺ノ西ノ傍ニテ大路ノ中ヲ遮テ南ニ流レ。勸修寺小栗栖ノ東ヲ經テ。六地藏ノ町ノ中ヲ流レ伏見河ニ入ル也

○長明道記ニ曰。近衛殿ノ御所ヨリ西ノ方ニ見ユル所ノ名ハ。逢坂關ノ邊ニアル歟。不審

袖比 所名 所載舊記見右近邊ニ今不詳

○宇治拾遺云。むかしこの殿の御所のうしろにふるき家ありけり。神ぞなりくる商人乃集ることあり 下略 ○詠古歌ニ

拾集 あらしやはいとゞ世をうきいわそそぐ袖の狹くらべて 長法

右如歌ハ。此所市場ノ故ニ龜屋アルナルベシ

招月庵 在山科 今不詳

此所ハ古ヘ東福寺塔頭栗棘庵ノ僧。徹書記蟄居ノ所ナリ。其居在ノ故ハ。此人以和歌譽アリ。或時詠歌ス。其製當世ヲ諷スルニ似タリ 上逆鱗シテ王ニテ。都下ヲ追出セラレ。仍テ住セリ。於此偶七月十三日ニ詠歌ス。其吟有感懷。仍有 勅許歸ル

勅勘和歌 ちゝ風ゆるとこの夕ぐれの秋を捨ぬ墨ぞ袖の色

勅許和歌 かくしよりこゝろ記ぬ八雲ぞよろこのとゝろゆるし

案スルニ書記ノ端此所ニアツテ。然後備中國小田郡小田村ニ居在ス。今尚於其地稱小田徹書記但別人歟。

山階宮 此所古人康親王ノ御所ナリ 其所傳云ヲ

今十禅寺ノ傍石橋ノ西北ノ地ナリト

人康親王　仁明天皇第四御子。四品弾正尹。号山科宮。貞観元年五月入道。同十四年薨

○定家勘物曰。山階禅師親王云云

○伊勢物語　むかしたかきこと申女御おはしましけりうせ給ひてなゝ七日のみわざ安祥寺にてしけり右大将藤原のつねゆきといふ人いまそかりけりそのみわざにまうで給ひてかへさに山科の禅師のみこおはしますその山科の宮に滝おとし水はしらせなどしておもしろくつくられたるにまうで給うて年ごろよそにはつかうまつれどちかくはいまだつかうまつらずこよひはこゝにさぶらはんと申給ふみこよろこび給うてよるのおましのまうけせさせ給ふさるにかの大将出てたばかりたまふやう宮づかへのはじめにたゞなをやはあるべき三条のおほみゆきせしとき紀伊国の千里の浜にありけるいとおもしろき石たてまつれりきおほみゆきの後たてまつりしかばある人のみざうしのまへの溝にすへたりしを。島このみ給ふ君也此石をたてまつらんとの給ひてみずいじんとねりしてとりにつかはすいくばくもなくてもてきぬ此石きゝしよりはみるはまされりこれをたゞにたてまつらばすゞろなるべしとて人々に歌よませ給ふ右の馬頭なりける人のをなんあをき苔をきざみてまきゑのかたにこのうたをつけてたてまつりける。

あるひとはいふそうるをみくあるをこそ
とるんとあらまし

●泉水字　右云伊勢物語假山ノ舊跡ナリ。其所云上
石橋ノ西北德林庵ノ後竹林ノ中ナリ　所云物語泉
石。今尚清涼ノ水アリ。云物語石。今在安藝國也。或書
云藝州安北郡。加部庄福王寺ノ硬石八人皇五十代
清和天皇御宇貞觀五年仲春紀州千里濱ニ光輝ノ
物アリ。人怪ンデ見ルニ此石ナリ。同十八年三月二十三日ニ
王城ニ移レ玉フ。其後二條后愛レ玉ヘリ。伊勢物語ニ。ア
カ子ドモ石ニゾカブルト讀ル此石ナリ。其後又　後醍醐
天皇愛レ玉ヘリ。時ニ藝州ノ守護人。武田伊豆守氏信



ヲ望ムコト切ナリ。然レドモ　勅許ナレ。觀應二年ニ至ツテ。中
納言公忠卿ニ賜ヘリ。公忠卿其年ノ冬　勅勘ヲエテ。安
藝ニ左遷ス其時氏信年來ノ宿望ノユヘニ。彼卿ニ之ヲ
乞テ以石城中ニ移ス。於此石大ニ鳴動シテ無止。仍テ
同國移福王寺。然後數百歳ヲ經テ。秀吉公日本ノ
名石ヲ集玉フ時。是レヲ洛陽聚樂ノ亭ニ移レ玉ヘリ。又太
閤異アリ。仍テ再彼寺ニ返遣ス。永祿年中ニ。聖護院道
增此石ヲ見テ詠歌スウゴキナキ國ニ殘シテ苔ノムス硬
石ヲバ今日見ツル哉　已上

○十禪寺　在右同所東ニ　寺南向　宗旨　天台　堂
額　十禪寺　竪額　掲佛龕破風上　本尊　千手觀音立像

二尺五寸　作　聖德太子　安厨子ニ　開基　不詳

号ス十禪寺ト此所ノ東北ニ十禪寺社アリ。是則上古廣山ノ麓ヨリ彼神影向ノ故ニ社ヲ立ツ。寺地則其社地ナル故ニ爲寺号ト也　當寺如今明暦丁卯年三月六日本院ノ御靈夢ノ故ニ所再興也事ハ委寺記ニ

○地藏堂　在同所東　堂南向形六角

本尊　地藏菩薩　立像八尺許　作　小野算

初安伏見東六地藏　事ハ記ト

△鱗九塔　在同堂傍　是即土人ノ説ナリ。實記未詳

○山科里　十禪寺ノ地ヨリ東ヲ云フ。人家南北ニ雙テ中ニ往還道アリ。土人多クハ以茜草絹布ヲ染テ世稱山科茜草爲名

追分所名　或作負別　云十禪寺東辻　此辻東ハ大津南ハ伏見西ハ京師ニ到ル也旅人ノ乘馬及ビ万物運送ノ牛馬於此往分ル故也又義作負別此事洛陽五条寺町蓮光寺本尊ノ縁起ニ出ツ載洛陽部

○森　在追分南半町許　此森名書ニ載ス　此地ハ諸羽明神ノ神輿遷幸ノ旅所ナリ名義不詳

○牛尾山　在追分辰方二十町許　麓ニ有民居。云小山村此ヨリ到山上中間ニ山河アリ。流遶路右ニ行左ニ行中ニ橋アリ其第二ヲ云大師橋左ニ瀧アリ。瀧ノ上ニ

岩アリ。云經石　一説ニ此流山村ノ音羽瀧上ニ云フ者
是也ト。但不見實記。又此流西ニ出テ小山村ノ中ヲ
通テ。河原ニ至ツテ。地中ヲ行街道ヲ遮ツテ。西方音羽
里ニ出テ。勸修寺ノ東ヲ流レテ至伏見河也

○牛尾山　詠和歌
拾遺百首
ながとしのとしのはつせのやまぢにはいくよのゆきのつもりぬらん　孔子

○音羽山　牛尾山ノ別稱也
拾遺集
夫木集
ちはやぶるかみのいがきのすぎがえをとはばこたへよ　三蹟
図紙ふるまたよやりやらぬ音羽山ちかのうらのこのしたぶし　後鳥

○音羽河
玉葉集
あしぶの関ちかくながれてこのもとのうらのこのしたぶし　家隆



定家卿
ちはやぶるかみのいがきすぎがえをとはばこたへよ　忠定

○音羽瀧
夫木集
ふるとやまとやまとのかみのいがきすぎがえをとはばこたへよ　行家
續古今集
ちはやぶるかみのいがきすぎがえをとはばこたへよ　光明峯寺入道

○牛尾山法嚴寺　在同山上　寺西向　宗旨　真言
堂南面　本尊　千手觀音立像三尺九寸　作　天智天皇
脇士　左不動明王　右毘沙門天共立像二尺二三寸許
作　弘法　安本尊同厨子　○脇壇安像　左行叡居士
右延鎮法師共坐像一尺五六寸許　作　不詳

○鎮守宮　在方丈後山　所祭　神明

○天智天王社　在佛殿後　所祭　社記不考

○供宮　在方丈左後山　所祭不考

○瀧　在方丈左山　号音羽瀧

傳云此所八古へ行敏居士當國木津川ノ水上ニ於テ延鎮沙門ニ逢テ志願ヲ示テ飛行ス鎮即居士ハ大悲ノ應化ナルコトヲ悟ツテ其居止ヲ求ルニ遇此山ニレテ居士ノ沓ヲ拾フ此地霊土ナルコトヲ知テ終ニ佛閣ヲ建世人呼テ清水寺ノ奥院ト云フ古へ伽藍巍々タリ舊地ハ今ノ山上在四五町中比大ニ衰フ如今ハ近世ノ再建ナリ

●大門字　寺ノ麓坂口竹林ノ所當寺大門蹟也

右坂ノ當西有溪此ヲ越テ西ノ山上ニ登ルニ[illegible]

未方ニ到醍醐山路アリ上醍醐伽藍南ノ傍ラニ出ツ

嶮路ナリ

○音羽里　在小山村隔街道西五町許　詠和歌

天木集　ことふきの里のこるこふるこの宮のたえぬ家

○若宮八幡　在同所　官北向　官記未考　例祭九月九日

大宅所名　在追分南大塚村南　有民居多村

号大宅　傳云大織冠鎌足公居レ玉ヘル故ナリト又

延喜帝ノ外戚ノ居館アリシ故ナリト云云　舊地今

尚有リ見次下

○岩屋明神社　在同所東山下　一鳥居南向石柱

在街道東方　額　正一位石屋大明神　竪額　新筆

有古額收社中　社西向　所祭　社記未詳　同社
南北ニ小祠アリ北山王南八幡　土人爲産沙神
例祭　九月九日　神輿三基アリ。祭日遷幸ノ旅所
大塚村路傍ノ西ニアリ
○大宅寺　在岩屋社鳥居東二町餘　宗旨　禪　曹洞
寺境南面　再興　月坡和尚　當寺　延喜帝ノ御母
母公館ヲ改メテ所爲寺也　延喜ノ母公ハ内大臣高
藤公女高藤室ハ山科大領宮路弥益女也。事載世継物語九七葉
王上地字　在石屋社南一町許　傳云　白河院離宮地也
唐門　同上　在右同社北
泉殿　同上　在右北　同池殿ナリ

●中御門　同上　在右同北
●親王澤井　同上　在石屋鳥居西二町許　田字也
傳云同時親王ノ御所井アリレト
○興福寺橋　石屋鳥居巽二町許街道中央石橋是也
興福寺即古ノ山階寺ニシテ此所ニ在リ
●興福寺塔舊跡　右石橋東道傍聖壇地是也
古興福寺在ル時ハ往還今ノ所ヨリ西ヲ行シトイフ
○興福寺初メ山階寺トタフ。大織冠鎌足公山州宇治郡小野郷山階村陶原ノ舘ヲ改メテ爲寺時ハ
齊明天皇三年也編年集釋書意
○御順禮記曰　天智天皇即位八年嫡室鏡女王

爲大織冠所建也

○續日本紀曰神護景雲元年戊子幸山階寺奏林邑及吳樂奴婢五人賜爵有差卷二十八出四十丁

○天武天皇白鳳元年以山階寺移大和國高市郡厩坂号厩坂寺源平盛衰記又元明天皇和銅三年淡海公移春日地改興福寺元亨釋書

佛足石　在山階寺　現石面佛足跡　此石今大和國ニ在リ。并光明皇后此石ニ寄テ詠ジ玉フ和歌。青石ニ彫テアリ。載別記

又云。今此所ヨリ遥西。東野村ノ内森野村ノ中ニ。土人称元興福寺所方一町餘アリ。此所山階寺別院アル所歟

○大圓寺　在大宅北西　寺南向　本尊　地藏菩薩

立像一尺餘　作　行願上人　開基不詳

傳云大宅寺ノ別院十リ上

小野地名　在大宅南　自此南北八以小野爲郷名

此所主村也

所載次下自東山清水寺巽藩谷經花山至勸修寺也。其欠出小野其巷郎大宅南而在十町餘當

勸修寺東

○鉈谷　在藩谷東七八町北花山西　或說曰閑院

高藤公遊獵ノ時山科ノ鉈丘三至ルト云フハ此所ナリト。

公遊獵ノ事載世繼物語

花山 所名 在瀧谷東 有民居名村。村分南北ニ云北花
山南花山ト 此所西ハ瀧谷路。東ハ云前出山科追分
南ハ至上野村西山勸修寺也。但今云所ハ北花山ナリ
○阿弥陀堂 在北花山中追分道北傍 堂南向
本尊 阿弥陀佛坐像四尺許 作 不詳
傳云斯像古東山阿弥陀峰阿弥陀堂本尊ト云云
或曰彼堂ノ本尊ハ今三條白河橋ノ東所安金剛寺
也。今此本尊ハ彼峯ノ麓別堂ノ本尊也ト
○蓮華谷 在右堂西 名義不詳
○八幡 同上 在堂東 同上
○櫃河 在右同所民居東二町許 水源云上四宮
河ニテ小関ヨリ出テ於花山南ニ流レ出ル六地藏町。此
河此所ニテハ櫃河ト号ストイヘドモ。於南名ヲ絶ス。尚
藏次下六地藏條下ニ
○元慶寺 一名應德寺又東山寺 在右同所阿弥陀堂
東北一町許 宗旨天台 寺南向 本尊藥師佛
坐像七寸 作 不詳 或曰所作僧正遍昭
○僧正遍昭像 坐像一尺五六寸自作 安右脇壇
當寺 陽成天皇御願。貞觀十一年所建立。元亨釋
書云。貞觀十一年建伽藍十二月配紀元日元慶寺
置年度三人云云
○僧正遍昭 住當寺仍称遍昭云花山僧正 傳

門下侍郎良安世之子也。累葉冠纓早翔羽林。俗名
宗貞　承和帝加近臣寵遇日渥。嘉祥三年三月
上崩不堪哀慕。登齊山剃髮。於慈覺之室學。且台密。
又勅於總持院受三部灌頂。于座主圓珍。元慶三年
爲僧正　仁和帝重昭德望。二年賜封百戶。又爲元
慶寺座主。寛平二年正月十九日化。釋書卷三
○花山法皇　人皇六十五代主上諱師貞。冷泉帝
第一子。治天二年後。寛和二年六月二十二日退位
入當寺祝髮。法諱入覺。又号花山院
○古今著聞集云。花山院乃ちとさ中納言義懷ら外
戚。殄右中辨惟成ら近臣ばかりのくらゐ天下ハ掌とされ

ども。惟成ら。出門ひそかに西東をおさめるのみにて。
いとまもなく。殿ばらの。ものうらみ。ことなくて。義懷
おのれ。ばかりと。ぬけていまさら世はまどろんのみ
いつくあんどのみと。義懷ら。ものうらみと。なきうち
とつひそかに。同じく出家。しぬれば。殿ばらの。愁ひ。
いつくしと世の人。ひとしなべて。始終。ものうとくて。
殿宮より。ぬけぐらるるに。
　ひとりとも。ものうきかなと。ゆくすゑも。
さても彼方に。世をそむくとは。
　思ふものの。ものうきかなと。
　思ふ。
　世を。
　捐ぬ乃。
　女房。

つ番ぶしいろうぶ。ぶぶりなくぬあろうさーぬうろとろうふ
とろはさせるしいてぷいるげさ浦うらど世界んぐがそくにそて
みぐれうろうに。栗田南阿いまぐ屋上人りうく荒人雑
とやこまれぐ扇なよ。妻子珍寶及王位臨命終時不
随者とうふ文を書くくもくしうろ紙に続ぢくきこうろ
よりくそいいくぐけんおこうろふ 集 巻十三

○平家物語曰。西蓮いむくしもかくおそ行くうこ事
どくとうり。冷泉院乃ぬぐうこう西くしく花山法皇を
乃十善乃帝位をとぐらせ奉ひりを。元貫乃民アんこが
豊のこうざなり 巻四

○當寺初ノ地ハ今ノ所ヨリ北西ノ山上ナリ舊跡今尚



存ス○夫木集爲家卿ノ和歌ニ

坂古惠天ノホリヤスクソ思ヒヤルタムクル法ノ花ノ山寺

是即當寺ニ向フ境景ヲイヘリ路ニ坂アリ

○和歌ニ詠花山

夫木集 いふせん岳乃さくらふ花乃ちりてゆう石今 中勢名寄

くくうろうぶうろふ義のむぶとそとそよて人今ふ人 光俊

○遍照塚 在花山寺南二町許人家西畠間 巡有

柳樹數本

澤石越 路名 南花山南西山間ヲ出東山三十三間堂

南路ナリ ○源平盛衰記曰。或ハ木幡大路醍醐路ニ

カヽツテ。阿弥陀峰ノ東ノ麓ヨリ攻イルモアリ 巻三十五 出十一丁

右阿弥陀峯ノ南ノ麓ノ路是ヲイヘリ

○栗栖野　在南花山己午間二町許　中ニ醍醐通ノ往還路アリ　按ニ古ヨリ就栗栖野異説アリ。然ルニ所載舊記葬田村麻呂於山州栗栖野即此所ニ彼塚アリ。仍テ以古歌載此

三ゆ春ふくかつさのゆとくつとて目とへてちるや紅葉ゆえ　雅縁
文本　ちるもしらすと宮ゐあるらけをとこやくつとちるもの村雨　経信

くつとゆく氷室の池つまとくとて　相模

右経信三室ノアタリト讀ルハ宇治ノ御室戸ヲ云也。相模詠ズル氷室ハ其跡池トナス近邊勧修寺ノ内ニアル者是也ト云フ



●高背坂　在右野　今名ヲ絶ス

○田村丸塚　在同野　其所南花山己午間自勧修寺北三町餘街道東三十間許畠間也　是即坂上田村將軍塚也

○舊記曰田村丸從三位兵部卿右京大夫贈大納言坂田丸二男　嵯峨天皇弘仁元年叙正三位任中納言同年九月任大納言兼右大將同二年五月廿三日丙辰奄然而薨年五十四即日賜贈物絹六十九疋常例五十九疋更加十疋調布一百段如常例商布四百九十端常例三百九十端更加百端米七十斛白米三十八石黒米三十八石常例五十一

石更加二十五石役夫二百人左右京各五十人山
城郡愛宕郡百人　桓武天皇第八皇子葛井親王
者田村丸之妹從四位下全子女御所誕也仍殊加
賜之　天皇不視事一日同五月二十七日大舍人
頭從四位下藤原朝臣緩麿治部少輔從五位下秋
篠朝臣金繼就大納言亭讀贈從二位宣命同二十
七日庚申戌二刻葬於山城國宇治郡栗栖村今俗
呼爲馬背坂于時有勅調備甲冑兵杖劒鉾弓箭鞆
鹽令合葬向城東立空之之下棺也即勅使監臨行事
矣其後若可有國家之非常天下災難件塚墓內宛
如打鼓或如雷電中略田村丸身長五尺八寸胸厚
一尺二寸向以視之如偃背以視之如俯目寫蒼鷹
眸髯懸黃金線重則二百一斤輕則六十四斤動靜
合機輕重任意怒則回眼猛獸忽斃咲則舒眉稚子
早懷丹欲顯面桃花不春而常紅到節持性松色送
冬獨翠武藝称代勇身踰人邊塞聞武華夏學文張
將軍之武略當案轡於前駐蕭相國之奇談宜執鞭
於後乘誰知毘沙門化身護國家矣已上田村丸傳

● 本願寺舊跡　在北花山辰方七八町　此地係東
西野村二村　昔日文明年中二蓮如上人此地ニ建
本願寺自其逐日繁昌ス然ニ聊カ爭論ニ依テ佐
々木定頼及山門三井ノ衆徒蜂起シテ當寺ヲ悉ク燒

失ス自其寺ヲ摂州難波ニ移ス。其後本願寺分レテ東西ト十ル。因之此舊跡不屬東西。堀築地ノ跡猶存ス

○蓮如上人塚　在同所艮半町許

蓮如　本願寺八代　明應八年三月廿五日化　八十五歳

○實如上人塚　在同所東六町許　當東野村東二町許

實如　本願寺九代　大永五年二月二日化　六十八歳

○空也寺　在東野村　宗旨　淨土　門南向　佛殿同

本尊　阿弥陀佛　坐像二尺許　作不考　脇士　觀音

勢至　立像二尺餘　空也上人像　立像一尺七八寸　作不考　安西脇壇

○空也上人塚　在佛殿東　傳云納遺骨

同石碑　立傍　撰者菊葉高泉和尚

開基　空也上人　中興　京師大雲院光譽性愚

○寺龍山白河寺　在空也寺北　宗旨　禪　屬妙心寺　本尊　阿弥陀佛　立像二尺餘作　慈覚　○當寺始淨土宗号野口山別時寺　後白河院宸牌并有石塔　中興　梅天和尚

勸修寺地名　今名民村有手地勸修寺故也　在栗栖野南隣　古此所モ栗栖ノ界内ニシテ云栗栖村也

○勸修寺　在右同所　宗旨　兼華嚴真言

法務　御門主　境地東面後ニ山アリ。古ハ伽藍全ク備ル中比ヨリ如今　○佛殿東向　本尊　千手觀音立像

安厨子ニ此尊　延喜天皇御等身ノ像ナリ　作不考

○當寺開基　範俊僧正　小野成尊弟子号鳥羽僧正

○建立本願　右大臣定方延喜四年ニ立ル　此所

初六　延喜天皇ノ外祖父宮路弥増ノ領所ナリ。改テ爲寺世継物語ニ云。宮路弥増ガ家ハ今ノ勸修寺ナリ

○氷室池　在同所方丈傍　是即チ所詠和歌ノ栗栖ノ氷室ノ地ナリ○年中行事和歌

入道大納言

ちはやふるかみよもきかぬあきのいけ　氷室の池の氷なりけり

所載延喜式栗栖野氷室地此所也ト云云　所載延喜式氷池五百九十六處ノ内也。凡ソ當國氷室地今不詳處　式曰葛野郡德丘氷室　愛宕郡小野土坂　賢木原　石前　已上　式曰以見役傜丁内隨損修之其叔氷太室別一百三十人給間食。人別日米一升四合。傜丁七百九十六人半　山城四百十四人半

見役六百二十一人　山城三百十六人半　氷池　山城一百九十六處凡運氷駄以傜丁充之云云

○兩社　在勸修寺南境内往還路北邊　社三社南面所祭　醍醐帝外祖宮路氏夫婦靈神　堂上勸修寺家祖也

○八幡宮　在右社南一町餘　鳥居向子丑間木柱宮東向　所祭　八幡　鎮坐記未考

攝社　賀茂社本殿北　若宮本殿南

○種子杉　在宮前　古所有杉爲風倒。截テ爲板面ニ阿弥陀佛ノ種子畫ガゴトクアリ。仍テ當宮ヲ号ス種子八幡

○神輿塚　在宮後山　傳云當宮古ノ神輿ヲ埋ム
所ナリ　土人爲產沙神　例祭　九月廿一日
小野地名　在勸修寺東一町餘　云上大宅南小野
是也　傳云出羽郡司小野氏女小町住此所仍号小野
○曼荼羅寺　院号　隨心院　在右同所街道東二町許
宗旨　真言　住職称門跡攝家子息任之
佛殿南向　本尊　如意輪觀音坐像三尺許安厨子
作　惠心僧都
○鎮守社　在堂巽西向　所祭　清滝權現
開基　仁海僧正或号小野僧正或号雨僧正
傳云師事元杲闍黎稟密學博錯綜衆流醍醐之側

○小野地啓密講之席四來受業者多世號小野密流
寛仁二年六月旱勅於神泉苑修請雨經法大雨下
三日夜長元之五長久之四凡詔祷九度皆降雨以
先長暦二年爲僧正時人呼雨僧正永承元年五月
十六日滅年九十二　釋書卷四
○曼荼羅寺號　眞俗雜記曰小野雨僧正夢母某
國成牛在矣然彼求得牛養育至死後剥皮畫兩界
曼荼羅安彼寺即号曼荼羅寺矣然後房舍及曼荼
羅等悉承久爲兵火化灰其後閑東爲懺悔被再興
也已上真言血脉
○小町水　在堂南竹林中　傳云小野小町所愛水

也　此所即其亭宅ノ地ナリト

○深草少将通路　右同所坤方民家七八軒アリ。此所ニ西ニ通ル路アリ是ナリ　此ノ路西ハ深草ニ通ジテ順路ナリ。但シ今ニ云フ深艸ノ里ニハアラズ。此所藤杜ノ南ニ當ル。今尚藤杜ノ南墨染ニ至テ深艸ノ郷内ナリ。今墨染欣浄寺ノ地古ヘ彼少将ノ宅地ナリト云フ。蓋今此通路ト云傳ルニ符合ス傳ニ云フ此路少将ノ百夜通ヒ所ナリト又云フ秀吉公ノ代。伏見城ニ訴ヘスル者。件ノ路ヲ行クニ其本懐ニ有ル理コトナシ。是則チ少将不ルノ達本望ヲ死セル先兆不吉ノ故ナリ。因テ此路断往還ヲトナリ

○欅塚　一名文塚　在右路巷南　傳ニ云フ小野小町艶色



アルニ以テ四方ヨリ送ル艶書如雨ノ仍テ為懺悔所収ト

○計塚　在右同所一町許南街道西ニ　傳ニ云フ四位少将往返ノ時。毎夜ノ數ヲ算ル所ト

○野色山　右兩塚ノ中間ノ小山是ナリ　古老曰ク今此号ハ誤ニシテ。實ハ夜色山也ト　由來未考

○古今著聞集ニ云ク。小野小町がわかくて色をこのみしとき。もてなしありさまたぐひなかりけり。壮衰記といふものには。三皇五帝の妃も。漢王周公の妻もいまだこのおごりをなさずと書り。かゝりければ衣には錦繍のたぐひをかさね。食には海陸の珍物をととのへ。身には蘭麝をうつし。口には和歌を詠じ。萬の男をいやしくおもひ

ちゝびてぐ〜。安達后よんをとうけさらし給よナセりて母を
うしるひ。ナ九すくそ安をとくれ。二十一すくそ兄よりろう。廿三
まくまを。とさ犯ごてーうぐ。草孤亥類の独へとなて。そを
のむうこるろうさ。いみぐ。ゆりはろ栄。団毎ろりたこ給え。
花やうるりしうぐ。せ奉くこまとくれつ。んをかるくろる
さとぐひもうとくのこるりしうぐ。家ろやぶれく月ちこ
むるくこるこ。屋こあまてこもぐふくぐうにこ毛留
まぐふるりているれぐ。文盛康秀ぐ。参川撮よくぐりろる
にこそるまてく。引ひあまこそ弟とうこさ毛乃祐ぐこて
ちこるれあくこいるんこそ。ふとこうこて。沒毛よかちぐれ
ゆくぐぐふぐこくよ。ぐこくひまぐこさ。ちくこ。へ弓れを

さう毛見にくこるべ〜　已上

●後山科陵　此陵出三代實錄　今不詳

○三代實錄曰。貞觀十三年十月五日丁未葬大皇
太后於山城國宇治郡山階山陵。九月二十八日崩。
卷二十出二十七八紙取要　皇太后　清和帝御母
藤明子忠仁公女　系圖傳　○按山槐記曰。後山階陵
是歟　記曰。後山階治部卿顯信。件所醍醐也。号
曼荼羅寺。其寺前有堀。仍不通。於堀下拜。以其侍
入堀内。今燒宣命寺僧等前侯燒宣命。于樹下。者夜
半歸亭云云。後人有勘可

●小野陵　今不詳　○延喜式曰。贈皇太后藤原氏在

●山城國宇治郡小野郷陵戸五烟四至東限百姓口分并勸修院山南限小栗栖寺山并道西限櫃尾山峰北限松尾山尾并百姓口分

●小野墓　同上○延喜式曰贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤

●後小野墓　同上○延喜式曰贈正一位宮道氏

右小野名ニ因テ載此所如四至今ノ勸修寺ノ西ナル歟

醍醐地名　在小野南　境地東西山中ニ有往還道西ハ自南花山至小栗栖西ニ山アリ隔ルコト或ハ五六町或七八町ニ因ル也事載次下

○醍醐天皇陵　在同所北人家東去一町餘平林中是　延喜帝ノ陵ナリ　江次第曰　醍醐天皇陵在醍醐寺北曼荼羅寺良云云即此所也記曰　天皇諱敦仁宇多帝第一子人皇六十代主上在位三十三年延長八年九月二十九日崩御年四十六十月十日庚子亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方四面八十町穴深九尺方廣三丈校倉高四尺三寸縱横各一丈一說云十一日寅二刻令著於山陵同日戌二刻奉入於御倉舊記公記并叔光卿日記

○古今著聞集曰延長八年九月二十九日　延喜帝

ものの心後よりくもりて崩御十月十一日醍醐寺の法師一合琴青眼筆秋風

季部王記ニ風香と載らまてる和琴中文八徽角の巴琴を取り
俗名入らまてる。巴琴ハ嵯峨ノ嵯峨義方和琴を
乗和乃あづまと冊治良和琴を
ちゝぶ琴平調よ
ちゝぶてそ伝ゝめ。義方ハ
ちゝぶ琴調ちゝぶ琴ハ



竹谷所名　在右陵東南二町餘　乗願房住スル故ニ此ノ
所ノ名世ニ高シ　沙石集云。醍醐竹谷ノ乗願房上
人ハ浄土宗ノ明匠ト聞エキ。亡魂ノ菩提ヲ吊フニハ
何レノ法カ勝レタルト　勅宣ノ下リケルニ。寶篋印陀羅
尼咒光明真言ノ勝レタル由ヲ奏シ申サル下略　乗願
房ハ法然上人ノ高弟ナリ

龍谷所名　在竹谷巳午ノ方
○陵町　當ニ寶院北人家東西ニ雙ンデ南北ニ通ル所也
○朱雀院陵　在陵町ノ北方人家北　其所爲藪
陵ノ方二間許巡リニ石ヲ雙ブ。上ニ樫ノ老木アリ是レ
御骨堂ノ跡ナリ。今尚云御廟
帝王系圖云天曆六年二月十四日　朱雀太上皇
落飾入道佛陀寺八月十五日崩。時年三十　葬來定
寺北野置　御骨於醍醐山陵傍
赤間地名　在陵町北　此所ヲ云赤間事ハ。古源平ノ
合戰ニ依テ九州赤間ノ地大ニ乱ル。其地ニ一寺アリ。
本尊藥師佛ノ霊告ニ因テ此所ニ移シ出所ヲ用イテ

号ス赤閑藥師ト。故ニ又此地ノ名トナルナリ

本尊　藥師佛　坐像二尺二三寸許　作　恵心

○深雪山醍醐寺　在御蓋山上并麓　上醍醐下醍醐ト云フ　山門西向　在山麓　安金剛力士二　長一丈二尺　作　運慶　此所ヲ云下醍醐

此所東北西ニ三門アリ。今西門ハ巍々タリ南北ハ労レリ。按ズルニ古ヘハ三門共ニ寛架ニシ。道風ガ書スル額アリ。

○古今著聞集ニ云　延喜乃聖代ニ醍醐寺を建立ありて
ところ〳〵風格と額をかゝせてまつるまでにべきならし佑らせ
て額二枚を染めかゝり。一枚を南大門一枚を西門の
料なり。真字の草の字にかくまゐるべきさまう　勅命ありけれ
ば佑はちがひて真字のかたにくはへてせうかうにまゐらせ。
真のかくうきたりまと南大門乃料ちかゝへてきとと。草の字の
額をそれ乃門はまゐられ料ちかゝまるも。佑風ゑとゑてゐくる
それ賢王やとゑでかゝるさとはそ草字乃額をまゐをるし
て光こひまるう。厳重ちげひて目比の義ありなかりて
うかゝれまゐる。然るゐしとことそうひ欲べしぺろまとわめ
ゆるなるべし　巻七

○本堂　在門内左南面　本尊　藥師佛　坐像二尺四五寸許

脇士東日光　西月光　共ニ立像四尺許

四天王　立像五尺許。太古代ノ躰也　已上作未考

此堂ハ延喜帝ノ御遠忌ニ當テ。秀吉公攝州万願寺

ノ一堂ヲ移シテ所建立也。然ルニ建立ノ時棟梁ヲノヅカラ倒ルヽコト度々アリ。咸イフ是ハ此　延喜帝ノ御追善ノ故ニ。天滿宮古ノ御恨ニ不堪シテ。堂舍ノ成ルヲ妬ミ玉フ。不如神慮ヲ赦メ法樂アランニハト。依是　勅詔アツテ。天滿宮ニ種品ノ奉幣ヲナシタヽヘバ。於此成就セリ

○塔五重　在堂巽　本尊　畫像二十一躰　心柱ニアラハス。其名略ス。是則佛言ノ說相曼荼羅ノ圖ナリ

○清瀧權現社　在塔西東向　所祭　左清滝權現　傳見次下　勝間大明神　傳未考　例祭　九月九日

○開山堂　在金堂東南向　所安置　弘法大師像

聖寶尊師像　坐像三尺許

長尾地名　云本堂北山端

○長尾天神宮　在同所尾崎　拜殿　南向　神殿　同所祭　天滿天神　土人爲産沙神　例祭　九月九日

神輿三基　其一基　天神　其二　清滝　其三　勝間明神

後門系集　遠歷元年[illegible]

[illegible]

當宮建立ノ起ハ當寺ハ　延喜天皇ノ御願ノ故ニ往昔ノ御遺恨ヲ彰赦故也　祭文委緣起

○三寶院　在山門外南向　住主号門跡　攝家息被任此所開山聖寶尊師ノ房ナリ　院号ハ即チ師三寶ヲ

彼持故也。當山ニ真言三流アリ　理性院　金剛院　三寶院　此所初名金剛輪院古ハ報恩院無量壽院理性院等ノ院家展轉シテ座主ヲ勤ム自近世三寶院座主位也或曰塔頭無量壽院ノ住主義演ハ二條晴良公之子也秀吉公コレヲ愛セラル。公當山櫻花遊覽ノ時義演其經營ヲ設ケラル。今門主ノ殿ハ公ノ被賞花亭ニテ在山上殿中ノ畫圖ハ狩野榮德ガ筆云云

○藤戸石　在門主庭前　是則チ備前國兒島浦ニアリシ岩ノ浮洲也秀吉公之ヲ聚樂城ノ庭ニ移サル。其後移此所

○此所塔頭中出和歌詞書所

理性院　阿弥陀院　無量壽院　無量壽院ヲ于世松橋ト称スル。後門ノ橋ノ畔ニ松アルユヘナリトイフ

續門葉集

[illegible]

同集

[illegible]

同

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

○花見山　在長尾巽　至山上左其地平

此所秀吉公毎春遊宴ノ地ナリ。文祿年中醍醐ノ花見トイフ此所ナリ

○深沙王塔　在右山東　小塔前ニ深沙大王像畫圖

○山上路　在深沙河東　河在塔前　自此登三十七町

毎町石ノ驗ヲ立ツ。上ニ書梵字ノ　阿弥陀院開祖成賢僧正ノ筆跡

上醍醐　此所ノ諸堂次第如左順路ノ躰也

○清滝社　在同所左山腹　拜殿東向　社同例祭　同下



○龍神影向石　在神殿内　神ハ是即清滝權現ナリ

傳云。初降臨ノ地ヲ号本宮嶽此ヨリ巽方一里許也

又同所ニ横尾毘沙門出現ノ瀧アリ

○閼伽井　在右社北觀音堂石壇下　是即醍醐味水也事見下

續〻集

上醍醐よこたりて行ゆく水のうつ

ゆりうる曼陀羅ゆ雨のかみ

るかのむすびとうしおく

雪ふる石乃流れを我ひとり

○觀音堂　在清瀧社北　前有截石階九十段　拾遺伊勢ノ順

堂南向　本尊　准胝觀音　傳見次下　○記曰

當堂准胝觀世音継帝守護尊也　宋雀村上一天
○子降誕依當尊法牛王加持効驗也云云
○五大堂　在准胝堂卯辰　堂東向　五大尊像長
各四尺許一一各記前養　中央　不動　作　聖寶
餘尊作未考　○記曰五大堂　延喜御門御願爲
朝敵降伏所造營也及承平年中於此尊前修平將
門調伏法本尊現劔頭血遂討將門尓已來怨敵降
伏天下安泰護摩修毎日之也至今無斷絶焉
○如意輪堂　号念覺院　在五大堂寅卯　堂東向
本尊　如意輪觀音　作　聖寶　安厨子内
記曰如意輪初安置准胝堂或時自登東嶺坐於石
上仍堂立別所安置矣本尊告尊師稱此山補陀洛
山而有金剛寶菜石坐此上觀照於十方衆生
授吉勢樂焉
○祖師堂　雙如意輪堂北　堂東向　所安置
聖寶尊師中央　觀賢僧正北　弘法大師南共坐像
作未考安厨子又同所三尺劔惡虵鱗ヲ叛ム劔即
聖寶ノ自作和州大峰ノ惡虵ヲ所害ナリ鱗ハ即彼
虵ニアル者也夫修驗道ノ行者ニ本山當山ノ二流アリ
本山ハ聖護院此流ノ山伏入峯スルニ時ハ七月當山ハ
三寶院此流ノ山伏入峯スルニ時ハ八月蓋ニ三寶院一
家ヲ立テ大峰ノ爲座主ニコト聖寶尊師ノ法驗及悪

蛇降伏ノ故ナリ。又聖寶ヲ称尊師ト法德ヲ稱美ノ義一汎ノ名目ナリ。傳見次下

○觀賢傳　姓秦氏讃州人爲聖寶上足延喜十九年任醍醐寺座主。茲職自賢始。延長三年爲僧正。此年六月十一日化ス

○白山權現社　在祖師堂如意輪堂中間　社記未考

○藥師堂　在如意輪堂午未方一町許　堂向午未

本尊　藥師佛　坐像六尺許　作　惠理僧都

此尊靈驗ノ事載テ有傳記。有病者即チ金銀ノ箔ヲ持來テ此像ニ貼ルニ靈應アリ。古今之ヲ成者無斷

右同堂內所安諸尊如左

○珎魔天　駕象長三尺八許　作　聖寶　○帝釋天　立像三尺許

○吉祥天　立像三尺許　作未考

○經藏　在藥師堂西

●延喜帝行宮地　右堂下壇地也　是即　延喜帝當山御佛詣行宮也

新勅撰集　醍醐乃ひよのかりくら　延喜乃御ゆ[illegible]

ちよの[illegible]

金葉集　醍醐の舍利會ふ[illegible]

[illegible]

開山聖寶傳　傳云或時尊師般若寺之住[illegible]庵思

惟我祖師弘法大師歸朝之時爲卜真言流布地投三鈷我又如是乃祈誓每朝當鳳城巽五色雲靉靆尊師審祈精云我願當彼明朝又可現次朝又如先然及三日仍尋雲登山於一所休息白髮老翁出現掬水云此水醍醐味哉是水今山上閼伽井水也忽然不見翁是地主横尾明神化也尊師臨水邊漏出地上清涼水也到峰有柏樹手伐之加持一百日也遂　清和天皇貞觀十六年六月一日招佛土共作雇脛如意輪二尊現三日作無用皮膠同十八年六月十八日開眼供養如意輪尊自立歩東三町立石上仍建堂石上（今如意輪堂是也）亦雇脛尊自起入於内陣立壇焉



號醍醐寺老翁掌水稱醍醐味故也或時　延喜帝勅尊師於雇脛尊前令祈求兒法即有應感誕皇子朱雀天皇是也其後又誕　村上天皇是也是故三代之天子以當山爲祈願所備佛閣入若干田園爾已來爲天子大法專留此寺矣鎮守是清瀧權現沙迦羅龍王第一女也第二女佛世爲成道來而在醍醐山又延喜二年二月七日現清瀧權現形降臨尊師持念於壇上示曰吾是沙迦羅龍王女也昔在唐土名青瀧即住此山護念然便寺号青龍寺我則護密乘故今凌萬里垂跡於此山施恩光於法界云云

○清瀧權現　弘法大師歸朝日同船來勸請高雄山

○報恩院　在右同所　称氷本房傍有清泉故也

続葉集　新長院よ住侍りける山の月をながめて

　　拾遺集　法師。清仁親王結子

　　月すめば花咲乃月紅葉ばの山里　法師憲海

○醍醐山中断絶房舎　所載舊書如左

●無量光院

　　続国集　桜舎舞ける雪ふこみ山里の住法師の

　　社乃宿雪乃中之院乃池の氷とく春の来ぬらし

　　ふまうはほどくるくさうねと雪て住侍る

　　とうりは

　　とはまうみくや厚さん法師の神ぬしふるさて法師を侍る和

●感琳院

　　同集　上醍醐乃紫琳院よ住侍る比月をながめて

　　さひさたくもあしとの嵐ふ秋乃月　法師光雅

●惠心院

　　同集　法師侍誉みまうりるまこびやづくこそ自歩ふしく

　　上醍醐惠心院よ住侍りこまうぐ法師

　　ちりさふくこの笑まかそくふくこ山里うとほ　侍従法師

●蓮蔵院

　　同集　まこ仮をちくこまうふ山里義法院乃むさうりる

　　こまふくこと住侍る

　　桜もとこ侍りやふあくこ乃こ三て侍ん　義厚法師

●遍智院

日集 遍智院ノ寺衆の法華中に坊中寂静楽を
はりあげ[illegible]ぬ風もるこえて 前僧正憲深

●籬坂 在當山 今不詳

○寂静谷 在開山堂北四町許

○延命院 在右同所

○白山權現社 在同所

記曰延命院者大納言元方卿所造營本尊安如意
輪像三體西尊師作東般若寺作觀賢僧正也住和州般若寺中
元杲作延命院僧正并四天王尊師作也初名正行院嘗
元方卿成筑紫國司下向時於海上吹惡風卿平日



以尊崇當山如意輪觀音即念之忽彼寺四天王中
現毘沙門天船上嵐波止矣是則當院本尊靈應故
改号延命院初本尊般若寺作雙安二尊其後元杲
僧正自造如意輪其夜二尊座壇隔中坐兩端元杲
思是即自作尊可安中臺義仍安中央今現利生新
真言血脉

○直谷 在上醍醐如意輪堂卯辰十八九町
此所山上淸涼宮ノ巽ニ向テ順行ナル故三云直谷又
南方一言寺ノ傍ヨリ路アリ自此二十町許

○南禪院 在同所 古佛宇備ハ今小堂アリ
本尊 阿弥陀佛坐像八尺 作 春日 側所安

地藏菩薩 立像五尺許 此尊靈驗アリ。田殖ノ地藏ト号ス。昔此所ニ信心ノ農夫アリ。朝暮此尊ヲ貴敬ス。或年農夫カ田一夜ニ殖ワタシテアリ。無不驚。然シテ此菩薩ヲ拜スルニ相好所々泥土ニ染玉ヘリ。是ノ事四方ニ響ク。世人号之也

○當院ハ後白河皇女宣陽門院ノ御建立ナリ。其後醍醐寺成賢僧正此所ニ閑居セリ

大路東 所名 云ヿ三寶院西門前二町許南

大路西 同上 云ヿ右同所西

古ヘ醍醐ノ往還道ハ件ノ所ノ人家ノ中ヲ通シナリ。依テ云ヿ大路東西

●毘沙門堂 在古大路東 今亡 舊跡今有樗

●焰魔堂 在大路西小泉通次 今草庵ナリ 淨土宗僧守之 閻魔王畫坐像三尺許 小野篁筆

此堂初在醍醐山

續詞花集 宗家の十住心論乃こゝろ/\を詠ける

焰魔堂にありけるに 異生羝羊心

むつのみちまよふひとつゝみくらくしてあまるふかさ哉 後人 玄和

○從大路西有至西路。其西有河 水瀨ト云上ニ作

闢河經勸修寺東來 渡之至西南出小栗栖。或

法琳寺大元堂舊跡見於下ニ

南里 所名 在大路東南二三町許

○善願寺　在同所西方東向　宗旨　天台　浄土
屬坂本来迎寺。居守之　本尊　地藏菩薩像分許
作　未考　傳云此尊ハ平相國公息三位重衡宅
胎ノ時其平誕ヲ祈ツテ所造也云々
庄口地名　在南里南
○一言寺　在右同所山下　境地東山也
宗旨　真言屬醍醐寺　門前西向有石壇　佛殿同
本尊　十一面千手觀音　立像七寸五分　作　安阿弥
脇士　左毘沙門　右地藏　共立像二尺許　作不詳
○内侍堂　在堂後西向　阿波内侍像　坐像一尺六七寸許
法躰持念珠　新作

當寺ヲ号一言寺ト人一心ニ御名ヲ称スレバ言下ニ志願ヲ滿ルノ義ナリ。建立本願少納言信西女阿波内侍剃髮シテ号真阿。常ニ觀世音ヲ念ス。因清水寺本尊霊告所立也

右所載南續石田。今所載次下至自醍醐卯辰間笠取　所名　在醍醐山東南二里許　有民居名村
村在東西二丈東笠取西笠取二〇笠取　詠和歌
古今集　夏ごろも雨もるとしを笠とりの山のしたつゆ袖にかけつつ
夫木集　さらてゆく笠とりの山のしたつゆ袖にかけつつ　基俊
○横尾　在同所西庄山上
○毘沙門　在同所　號横尾毘沙門　記前

○清瀧社　在西笠取東山上二町許

鳥居東向　拜殿東向　社同　所祭同醍醐山

木柱

土人爲産沙神　例祭　九月二十三日

神輿二基アリ遷行ノ旅所在本社北二町許其地有

社号四宮　所祭　同本社

追考　安祥寺條下

○山科安祥寺　土人傳說曰當寺中古就兵乱断絶ス然後再建ス今地是根本地ハ從此南方勸修寺東八町許今勸修寺所領云云予未見其地也後人可有考

山州名跡志卷十四終